

## 杜甫の「拙」について

著者	谷口 真由美
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	47
ページ	41-54
発行年	1989-06-25
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00149923">http://doi.org/10.15068/00149923</a>

## 杜甫の「拙」について

一

杜甫の詩には、「拙」という語の用例が二十六例ある。それは、同時代の王維に用例がなく、李白に六例（うち、「拙妻」二例）、孟浩然に一例、韋応物に十例あるにとどまるのと比べて、極めて多いといわなければならない。

杜甫の「拙」に着目した先行の論文としては、安東俊六氏に「杜甫における『懶』と『拙』」がある。<sup>(註1)</sup>「懶」・「拙」は、単に杜甫のものぐさな性格や処世のまずさを言ったものでなく、積極的な主張をこめたものである、という鋭い指摘をはじめ、意味深い発見と示唆に富む。ただ、安東氏は、乾元二年の作「發秦州」詩以後の用例にのみ注目して、以前の作品には全く言及していない。しかし、私は、それ以前のいくつかの作品にあらわれる「拙」は、杜甫の生き方そのものに、以後のどの時期よりも最も深く係わる

## 谷口真由実

ものであると考える。特に、安祿山の乱の勃発した天宝十四載（七五五）から、乾元二年（七五九）の四年間には、「自京赴奉先縣詠懷五百字」・「北征」・「發秦州」・「發同谷県」など、重要な作品に心ず見えるのが印象深い。たとえば、「自京赴奉先縣詠懷五百字」。この作品は、天宝十四載（七五五）十一月、安祿山の乱の直前、杜甫が、長安から奉先縣に疎開させていた家族を見舞うために旅立った時の作である。あるいは、安祿山の反乱をすでに伝え知っていたのか、全詩に緊張感と危機感がみなぎり、中ほどには、その当時、温泉のある華清宮に行幸していた玄宗に対する鋭い諷諫が述べられる。

そして、その詩の冒頭は、

杜陵有布衣 杜陵に布衣有り

老大意轉拙 老大 意 転た拙なり

とうたいだされる。つまり、「拙」の語は、杜甫の代表作

である「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩の冒頭から重要な意味を荷って現われるのである。従って「拙」という語にあらわれた杜甫の意識をさぐることは、杜甫の詩を理解する上で重要な意味を持つであろう。

本稿は、右に掲げた詩などを中心に、拙という語の用例を検討し杜甫の内面を追求しようとするものである。

## 二

まず、初めに、杜甫以前の文字に現われる「拙」の用例中、主だったものを、詩を中心として考察する。

後漢の許慎の『説文解字』によると、「拙」は、「不巧也。从手。出聲。」であり、段玉裁は、「不能爲技巧也。」（技巧を爲す能はざるなり。）と注している。「拙」は、「巧」の対立概念であることが分る。「巧」は、同書に「技也。」と説明するように、自然のなりゆきにまかせるのでなく、物事に人の手を加えることである。従って、「拙」は、物事に人の手を加えないこと、あるいは加える能力の無いこと、つまり「つたない」ことを表す。本来、人間の技術や手の働きについての用語である。

だが、文学において「拙」の語は、自分を評価する場合に用いられることが圧倒的に多い。その上、特定の詩人が

頻繁に用いて、その詩人を特徴づける大きな要素となっている。以上の二点が、詩歌に現われた「拙」の著しい特色であり、このことから、自分自身を「拙」と評した詩人の系譜とでも言うべきものを考えることができえする。

管見では、自分自身を評価する語として、「拙」を意味的に用いた最も早い例は、西晋の潘岳（二四七～三〇〇）である。『晋書』潘岳伝などによると、潘岳は幾度か仕宦したが、志を達することができず、そこで「閒居賦」を作った。そして、「閒居賦 并序」には、「拙」の語が、計八回も用いられているのである。これは、『文選』の「拙」の用例二十三例の三分の一にのぼる。

序の冒頭には、次のように述べる。

岳嘗讀汲黯傳、至司馬安四至九卿、而良史書之、題以巧宦之目、未嘗不慨然廢書而歎、曰、嗟乎巧誠有之、拙亦宜然。

司馬安についての記述は、『史記』汲黯伝の末尾に付されている。司馬遷は、主君に対しても直言をはばからない政治家である汲黯に対して、同じく九卿となったが、「善宦」、つまり、うまく立ちまわって官を得た人物として司馬安を描いている。「善宦」のもとの意味は、「宦人」として職務をうまく遂行することであるが、ここで司馬遷が、

司馬安を評した「善宦」という言葉には、権力者に迎合する者への痛烈な批判と憤りがこめられている。しかも、潘岳は、それを「巧宦」と言いかえて司馬安への批判を鮮明にした。そして、その上で、「巧誠有之、拙亦宜然」と述べる。ここでの「拙」は、「拙官」の意味である。「官途に拙い者がいるのも当然なのだ。」

潘岳は続いて、司馬安と対比すべき自分の官僚生活をふり返って叙述する。

自弱冠、涉乎知命之年、八徙官而一進階、再免一除名、一不拜職、遷者三而已矣。雖通塞有遇、抑亦拙者之效也。

潘岳は、「巧宦」（善宦）司馬安に対して、自らを「拙」き者と評価している。これらの「拙」の例は、官界でうまく立ちまわることができない自己を捉えたものであり、あくまでも「巧宦」の反義語としての「拙」である。「閑居賦 并序」に見えるほとんどの「拙」はこの用法である。これらは、「拙」であること自体に積極的価値を見出してゐるわけではない。

しかし、同賦の次の三例には、屈折した心理を読み取ることができるといえる。

①何巧智之不足、而拙艱之有餘也。（何ぞ巧智の足らずし

て、拙艱の余り有るや）

②拙者可以絶意寵榮之事矣。（拙き者は以て意を寵榮の事に絶つべし）

③仰衆妙而絶思、終優遊以養拙。（衆妙を仰いで思ひを絶ち、終に優遊して以て拙を養はん）

「意を絶つ」・「思ひを絶つ」と、繰り返す、ことさらに述べなければならなかったように、逆に潘岳は、榮達への強い願望を捨てきれなかったがいない。その葛藤を経て、最後に作者は、一つの決心へこぎつける。それは、「拙を養」う――官界でうまく立ちまわったり、へつらったりできない自分の人間性を大切にしようというものである。

つまり、潘岳にあっては、閑居を決意するに至る葛藤の中で、自らを「拙」と評価して、「拙」とされる生き方こそ、実は逆に人間にとって本質的なものであることに思い至ったのである。

このように、潘岳は、多くの場合、官途に拙い自己の現状を外面的に表す語として「拙」を用いており、そこに内面的な価値を見出そうとする「拙」の用例は、突きつめると「養拙」一語のみである。

約一世紀のち、東晋の陶淵明は、作品の中で繰り返し「拙」を詠じた（詩文あわせて八例）。

淵明四十二歳の作に、「歸園田居五首其一」(『靖節先生集』卷二)がある。

少無適俗韻 少くして俗に適ふ韻無く

性本愛邱山 性は本 邱山を愛せしも

誤落塵網中 誤りて塵網の中に落ち

一去三十年 一たび去ること三十年

羈鳥戀舊林 羈鳥は旧の林を恋ひ

池魚思故淵 池魚は故の淵を思ふ

開荒南野際 荒を開く 南野の際

守拙歸園田 拙を守りて 園田に帰る

(中略)

久在樊籠裏 久しく樊籠の裏に在りしも

復得返自然 復た 自然に返るを得たり

「塵網」・「樊籠」は、人々が利害・榮達を求めて汲汲と

し、陰謀をめぐらす、いわばことさらに「巧」を尽す俗世

間、官僚社会である。そのような世界に「誤」って落ち、

長くいたが、「拙を守」って「園田に帰」って来たと述べ

る。「拙」は、俗世間に合わせることなく、自然を愛する本

性をいい、「守拙」は、世わたりのまずさを守り通して、つ

まり、根柢にあるあるがままの自分の本性・生き方を大切

にすることを意味している。次の諸例もほぼ同じである。

①人事固以拙。 人事は固<sup>まこと</sup>に以て拙なるも

聊得長相從 聊か長く相從ふを得ん

——「詠貧士」(『靖節先生集』卷四)

②人皆盡獲宜 人皆尽く宜しきを獲たるも

拙。生失其方 生に拙くして 其の方を失ふ

——「雜詩十二首其八」(『靖節先生集』卷四)

③寧固窮以濟意 寧ろ固窮以て意を濟し

不委曲而累己 委曲して己を累がず

既軒冤之非榮 既に軒冤の榮に非ず

豈縑袍之爲恥 豈に縑袍を恥と為さんや

誠謬會以取拙 誠に謬會以て拙を取る

且欣然而歸止 且つ欣然として帰止せん

——「感士不遇賦」(『靖節先生集』卷五)

④性剛才拙 性は剛にして才は拙

與物多忤 物と忤ること多し

——「與子儼等疏」(『靖節先生集』卷七)

これらは、いずれも、世俗の価値観では、世わたりがへ

たなこと、生き方が不器用なことをいうが、淵明は、そこ

に独自の価値を盛り込んで、自分を「拙」と評しているの

である。「感士不遇賦」にも見える「固窮」は、『論語』衛

靈公に「君子固窮」とあるのを転じて、困窮の中にあつて

も自分の本志を守りぬくことを意味する。この語の用い方・内容ともに、「拙」語に類似する。

いずれにせよ、潘岳にあっては、多く、官途に拙い自己の外面的な状況を表す用語であった「拙」が、精神的な価値観を表す語に変化してきているのである。

「拙」の語の用い方において、陶淵明は潘岳の用い方をひきつぎながら、それを大きく進めて、内面的な価値観を示す言葉として用いるようになった、と言うことができよう。そして、杜甫は、潘岳においては未分化だったが、陶淵明において、顕在化してきた「拙」の積極的な意味内容を受けついだのだと私は考える。

### 三

天宝十年（七五一）、献上した『三大禮賦』が玄宗の目にとまり、杜甫は集賢院に待制を命じられた。秋、長い貧窮生活がたったのか、折からの長雨に苦しみ、杜甫は病に臥した。回復後、同年冬に作られた「投簡咸華兩縣諸子」（咸・寧）・華（原）兩縣諸子に投簡す）には、まず、赤県たる長安の高級官僚達の美々しいでたと、それに對して、無残な自分の困窮生活を描く。

1 赤縣官曹擁才傑 赤縣の官曹 才傑を擁し

- |    |          |                    |
|----|----------|--------------------|
| 2  | 軟裘快馬當冰雪  | 軟裘・快馬もて 氷雪に當る      |
| 3  | 長安苦寒誰獨悲  | 長安の苦寒 誰か独り悲しむ      |
| 4  | 杜陵野老骨欲折  | 杜陵の野老 骨折れんと欲す      |
| 5  | 南山豆苗早荒穢  | 南山の豆苗 早に荒穢         |
| 6  | 青門瓜地新凍裂  | 青門の瓜地 新たに凍裂す       |
| 7  | 鄉里兒童項領成  | 郷里の兒童 項領成り         |
| 8  | 朝廷故舊禮數斷  | 朝廷の故旧 礼數断ゆ         |
| 9  | 自然棄擲與時異  | 自然 棄擲されて時と異なる      |
| 10 | 况乃疏頑臨事拙  | 況んや乃ち疏頑にして事に臨むに拙   |
| 11 | 飢臥動卽向一句  | 飢臥 動もすれば即ち 一句に向ふ   |
| 12 | 敝衣何啻聯百結  | 敝衣 何ぞ啻に百結を聯ねるのみならん |
| 13 | 君不見空牆日色晚 | 君見すや 空牆 日色晚しとき     |
| 14 | 此老無聲淚垂血  | 此の老 声無く 涙血を垂るるを    |
- この詩の十句目に「拙」という表現があらわれる。「自然棄擲されて時と異なる。況んや乃ち事に臨むに拙きをや」（9・10句）という形で。作者は、「杜陵野老」を「疏頑」（世間の道理にうとく頑なである）・「臨事拙」（時局にうまく対応できない）と、あざわらう。しかし、その深部には、社会的矛盾（「南山豆苗早荒穢、青門瓜地新凍裂」）

にみちた現実をあまりにも鋭敏に見つめてしまう目があることを杜甫は自覚している。また、それ故に、高い政治的理想を持たずにいられぬ自己があり、その結果として官僚世界で「事に臨むに拙」い自我が屹立してしまう。その自負をこめながら「拙」という自嘲の語を用いたのであろう。

ここで注目したいのは、作者が自分自身を「杜陵野老」(4句)・「此老」(14句)と、三人称で呼んでいることである。「杜陵」は、長安東南郊の地名。杜甫の旧居があつたので、このように呼んだもの。「野老」は、いなかおやじの意。杜甫は「杜陵に住むいなかおやじ杜甫」というこの人物を主人公として、一首を展開する。何故、杜甫は、自らを三人称で描かなければならなかったのだろうか。

まず、気付くのは、冒頭の一～四句を見ると、「赤県の官曹」―官僚―(1・2句)と、「杜陵の野老」―自分―(3・4句)という鮮明な対比がされていることである。自分を無位無官、在野の一人の人間として、長安の高級官僚に拮抗させている。「官曹」と「野老」の厳しい対比が、詩の枠組みとなっているのである。

当時、集賢院に待制を命じられていたのであるから、官僚であつたことは明らかなのだが、作品世界において、杜甫は官僚ではない者の視点から状況をみているのである。

このように、官僚社会、さらに世界全体を見通すことのできる、拘束のない地点に自らを位置づけようとする意識が、ことさらに杜甫にはあつたのではないか。

自らを三人称で描いたのは、作品世界において、官僚ではない一人の人間として、自分を位置づける意識が、強く杜甫にあり、しかも、そういう自己を客体化して見つめなおす視点を獲得するためであつたといえるだろう。

ところで、先述の「疏頑」(10句)・「臨事拙」(10句)は、いずれも、人間の生き方を批評する言葉である。自己を客体化しようとする試み―即ち自らを三人称で語ろうとする試み―が、自己を「拙」と捉える詩の中に強くあらわれているのは興味深い。三人称で自らを語ることと、自己を「拙」と批評したこと、この二つには、深層においてつながる意識があると思われる。

事実、重大な問題と思われるが、その後の「拙」という表現をもつ詩には、繰り返し、自己の三人称による表現があらわれるのである。

「投簡咸華兩縣諸子」から四年後の「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩(天寶十四載、七五五)にも、また次の「北征」詩(至德二載、七五七)にも、「拙」という語と、自己の三人称あるいは、客体化した呼称による表現があらわれ

る。

まず、「自京赴奉先縣詠懷五百字」をみてみよう。

1 杜陵有布衣 杜陵に布衣有り

2 老大意轉拙 老大意 転じた拙なり

3 許身一何愚 身に許すこと 一に何ぞ愚かなる

4 竊比稷與契 竊かに 稷と契とに比す。

「杜陵に一人の無官の男がいる。その男は年をとって、ますます世の中にうまく合わせようという気持ちがなくなってきた。」ほかでもない自分自身のことを「余」とか「我」と一人称では語らず、「杜陵有布衣」と他人を描くように、杜甫は表現する。それについて、吉川幸次郎氏は『杜甫詩注』（第一冊、五二四頁）で、次のように述べている。

五百字の長詩、この一句をもっておこるのは、痛烈に無遠慮な「詠懷」を展開するのの冒頭として、批評者としての自己を確認する。

自分を物語の主人公のように描く、この三人称的な表現は、吉川幸次郎氏の指摘するように、「批評者としての自己を確認する」行為といえる。しかし、さらにそれにつけ加えて言うならば、自己を突き離し、客体化して捉えようとする行為だった、と言えるのではないか。吉川幸次郎氏

は、批評者である自分を「布衣」として位置づけたと考えておられる。だが、さらにつきつめて言うならば、表現者である自分が、作品世界の中で、批評者としての自己を客体化するものではないか。換言すれば、作品世界の中の自己＝布衣と、現実の自分＝表現者とを分かち、両者を自立させる試みだったと私は考える。自らを突き離すことによって、激動の（同年の十月に安祿山の乱が勃発）同時代の世界の中に位置づけ、自分自身及び、自分自身を含めた世界を捉え直す意図を、この詩の冒頭の三人称的表現は、暗示しているといえよう。だからこそ、杜甫は、官僚社会に対峙する存在としての無官の一人の人物として、自己を位置づけたのである。

「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩より二年後、「拙」の表現をもつ至徳二載（七五七）の「北征」詩を見てみよう。

この詩は題下に、「歸至鳳翔、墨制放往鄜州作」（帰りに鳳翔に至り、墨制もて放たれて鄜州に往きての作）と注する。安祿山の賊中より鳳翔の行在所にかけつけ、その功績によって、杜甫は一度左拾遺の職を授けられた。だが、房琯を弁護したために、皇帝の怒りを招き、鄜州の家族のもとへ帰ることを命ぜられた。その時の作である。

1 皇帝二載秋 皇帝 二載の秋



- 2 閏八月初吉 閏八月 初吉  
 3 杜子將北征 杜子 將に北に征き  
 4 蒼茫問家室 蒼茫 家室を問はんとす

(中略)

- 35 青雲動高興 青雲 高興を動かし  
 36 幽事亦可悅 幽事も亦た悦ぶ可し  
 37 山果多瑣細 山果 瑣細多く  
 38 羅生雜橡栗 羅生 橡栗を雜ふ  
 39 或紅如丹砂 或は紅きこと丹砂の如く  
 40 或黑如點漆 或は黒きこと点漆の如し  
 41 雨露之所濡 雨露の濡す所  
 42 甘苦齊結實 甘苦 齊しく実を結ぶ  
 43 緬思桃源内 緬かに思ふ 桃源の内  
 44 益歎身世拙 益 身世の拙なるを歎く

この詩の四十四句に、「拙」という表現があらわれる。

北の鄭州へ向けて旅立った「杜子」が、道途の自然に喚び起された感慨を描く場面である。なかでも、ふと目にした「山果」(山の木の実)は、紅い小さな実やら、ぶつりと黒い実、甘いもの苦いもの多種さまざまでありながら、いずれも秋雨に鮮やかな実りを輝かせている。それを見て、人間と自然とが調和したかの桃源郷へと「緬かに思」いを馳

せるのである(四十三句)。しかし、現実には桃源郷とはおよそかけ離れており、理想を抱けば抱くほど自己は官僚社会からはじき出されてゆく。「益身世の拙なるを歎く」はかないのである。ここでの「拙」は、官界でのわが身の拙さだけをいうのではなく、自己の抱く政治的理想の実現に全く近付けない「拙」さを痛みをこめて言う語であろう。ここでも杜甫の「拙」は、社会的関心と政治的理想を軸としているのである。

「北征」詩の三句には、「杜子將北征」とあって、自己を「杜子」と称している。一般には自称とみなされている言葉である。しかし、「杜子」は、男子の敬称「子」を加えた語で、日常に自称として用いることは絶対に無い。むしろ先述の二首の三人称表現と同様に、作品の主人公として表現していると思われる。だから、「杜子」は、三人称表現に極めて近い、自己を客体化した呼称と考えられる。では、何故、自己を客体化した呼称で表現したのでだろうか。

『杜詩詳註』(卷之五)が注するよう、「北征」の詩題は、後漢の班彪の「北征賦」を意識して題したものと考えられる。「北征賦」は、王莽の反乱のために漢の亡んだ時、班彪が難を避けて、長安から北の安定へ向って旅立った時の作である。杜甫も、この時、鳳翔から、東北方向に当る

鄭州へ赴く旅をしているので、「北征賦」を意識して「北征」と題した。そして、そのことが象徴するように、表現の面においても内容面においても、辭賦の特色が見える。

「北征賦」の冒頭を見てみよう。

- 1 余。遭世之顛覆兮 余 世の顛覆するに遭ひ
  - 2 罹墳塞之阨災。 墳塞の阨災に罹る
  - 3 舊室滅以丘墟兮 旧室 滅びて以て丘墟となり
  - 4 曾不得乎少留 曾て<sup>しばしば</sup>少くも留るを得ず
  - 5 遂奮袂以北征兮 遂に袂を奮って以て北に征き
  - 6 超絶跡而遠遊 超として跡を絶ちて遠く遊ぶ
- 「北征賦」と「北征」詩とは、主人公（或いは作者）を取りまく状況―乱世―が極めて似ている。また、冒頭に旅立ちの目的を述べる点で、「北征」詩は、「北征賦」を受け継いでいるだろう。しかし、「北征賦」の冒頭は、「余」という一人称で始まり、表現者と作中の「余」とは未分化で、ことさらに区別されてはいない。一方、「北征」詩では、三句に「杜子将北征」と描く。自己を「杜子」と敬称つきの姓で呼び、現実の作者からは切り離しているのである。杜甫のこのようなうたい出しは、かと言って全く新しいというわけではない。潘岳の「西征賦」の冒頭に、既にその雛形を見ることが出来る。

- 1 歳次玄枵 歳は玄枵に次り
  - 2 月旅玆賓 月は玆賓に旅す
  - 3 丙丁統日 丙丁 日を統べ
  - 4 乙未御辰 乙未 辰を御る
  - 5 潘子憑軾西征<sup>△△</sup> 潘子 軾に憑りて西に征き<sup>△</sup>
  - 6 自京徂秦 京より秦に徂く
- 「杜子」に類似した表現の「潘子」が、「西征賦」に見えること、また、作者が自己を「杜子」と表現した意味については、すでに吉川幸次郎氏の指摘がある。（『杜甫詩注』第四冊、二六五頁）。

やはり莊重の語気。「杜子」の「子」は孔子、孟子、老子とともに、男子の重々しい美称。それを自称とするのは、知識人の自負。杜詩ではこのみに見えるが、かつての散文では、長安の書生であったころの「雑述」「秋述」に、「杜子曰わく」、「杜子、病に長安の旅次に臥す」など。自称をも、議論の散文のごとく、重々しくした、前引の潘岳「西征の賦」歌い出しの自称も「潘子」。吉川幸次郎氏は、「杜子」を、莊重にするための自称と捉え、議論の散文のように歌い出しの自称も重々しくした、と説明している。しかし、「杜子」を単なる自称と捉えることには疑問が残る。既に「西征賦」の中で、潘岳が

自らを「潘子」と呼んだ意識そのものが、錯綜し危機的な状況にあった現実に対して、自己を確立しようとするものだったと考えられる。<sup>(注2)</sup>それを継承しながら、杜甫は自己の客体化をも試みて、自己を「杜子」として詩中に登場させたのだろう。その意味で、先述の二詩の表現「杜陵野老」・「杜陵有布衣」に極めて近い表現といえよう。吉川幸次郎氏につけ加えて言うならば、自己を客体化して凝視しようとする意識が杜甫にはあったのではないか。

ここで、一本の糸が明らかに浮かびあがる。見てきたように、天宝十年（七五一）から至徳二載（七五七）の七年間に、杜甫が自ら「拙」と評した詩は、いずれもまた、自らを三人称ないしは、それに類似する呼称で表現している。これらは全て、自己の三人称的表現によって、批評者として自己を自立させたのであり、そのような視点の獲得こそが、切迫した状況下に生きる自己を「拙」なる存在として確認することを可能にしたのである。

杜甫の「拙」は、政治的理想の実現の意志を貫こうとするがゆえに、官僚世界と齟齬を生じる自己を認識する語である。また、さらに「拙」は、理想の実現を希いながら、少しも近付きえない痛みをこめて自己を評する語でもある。

#### 四

杜甫は、「自京赴奉先縣詠懷五百字」・「北征」をはじめ、安祿山の乱の前後七年間の重要な作品において、たびたび「拙」と自らを評して来た。だが、その時期だけに限らず、杜甫はこの語を多用する。そして、その中で特に重要な意味を持つのは、秦州・同谷の流浪の時代に、この語がしばしばあらわれることであろう。まず、「發秦州」詩を中心として、「拙」と評した意識を考察する。この詩は、<sup>(注3)</sup>原注に述べるように、乾元二年（七五九）、秦州をあとにして、南の同谷へ旅立つ時、杜甫四十八歳の作である。

- 1 我衰更懶拙 我 衰へて更に懶拙
  - 2 生事不自謀 生事 自ら謀らず
  - 3 無食問樂土 食無くして樂土を問ひ
  - 4 無衣思南州 衣無くして南州を思ふ
- （中略）

- 17 此邦俯要衝 此の邦 要衝に俯し
- 18 實恐人事稠 實に人事の稠<sup>しほ</sup>きを恐る
- 19 應接非本性 應接 本性に非ず
- 20 登臨未銷憂 登臨 未だ憂ひを銷さず
- 21 谿谷無異石 谿谷 異石無く

- 22 塞田始徵收 塞田 始めて徵収あり  
 23 豈復慰老夫 豈 復た老夫を慰めん  
 24 惘然難久留 惘然 久しく留まり難し  
 25 日色隱孤戍 日色 孤戍に隠れ  
 26 鳥啼滿城頭 鳥啼きて 城頭に滿つ  
 27 中宵驅車去 中宵 車を驅りて去き  
 28 飲馬寒塘流 馬を寒塘の流れに飲ふ  
 29 磊落星月高 磊落として 星月高く  
 30 蒼茫雲霧浮 蒼茫 雲霧浮かぶ  
 31 大哉乾坤内 大いなる哉 乾坤の内  
 32 吾道長悠悠 吾が道 長へに悠悠たり

旅の直接の原因は、第三・第四句に述べるように衣食の欠乏であった。しかし、それは、二次的な原因だったのでないか。先述のように、批評者として、自己を位置づけてきた杜甫は、ここでも、秦州をたつ動機を自ら分析する。それが、冒頭の二句である。「私は老いさらばえて、一層何事につけうまくしようという気になれず、暮らし向きを自分であれこれ工夫することさえしなくなった。」これこそが旅立ちの本質的な動機であった。では、旅立ちの動機となった「懶拙」とは、どのような意識で表現された言葉なのだろうか。

先述の論文の中で、安東氏は、「發秦州」・「發同谷縣」の「懶拙」は、離俗の志向を主張した用法とは言えず、「發秦州」詩では、「主張とはむしろ逆に、自らの性格あるいは処世の仕方欠点として、『懶』・『拙』を後退的否定的な意味で用いているといつてよい。」と述べている。しかし、「懶拙」の語は、管見では、先例を見出できない語であり、杜甫の詩においても、ただこの詩とほかでもない「發同谷縣」詩にのみ見える。そのことから、後退的否定的な意味とのみ片づけることのできない言葉であると考えられる。

それは、先述の「杜陵有布衣、老大意轉拙」の意識に通ずるものがあるが、また、かつて杜甫が左拾遺の職にあった時の作「曲江對酒」の次の用例にもやはり通ずるであろう。

縱飲久判人共棄 飲を縱しままにして 久しく人の共に棄つるに判す

懶。朝眞與世相違 朝するに懶なるは真に世と相違ふ  
 「朝するに懶」とは、自己の脱俗性を言う表現だろうが、そこには、官僚社会の腐臭への反感と、放逸の上に開きなおったふてぶてしさがある。「拙」が政治的理想に固執するのに対して、「懶」はそのような自己を認め受け入れよ

うとする意識といえよう。

さて、「發秦州」の十七句から、二十四句は、具体的に秦州を去らなければならない理由を陳べる。その中で、「人事の稠きを恐」れ（18句）、「応接は本性に非ず」と、自己の生のあり方を言い切っている。これは、とりもなおさず冒頭の「懶拙」を言いかえたものにほかならない。「拙」は、政治的理想に固執し、そのために実際の官僚世界ではうまく立ちまわれない自己を表現したものであり、進んでその自己を社会的な批判者として作品世界に確立しようとするものであったが、現実の杜甫は、房琯事件以降も、政治的挫折はなお重なり、華州司功參軍の地位さえも捨てねばならなかった。そうした情況の中で、「拙」なる自己を包容し、一見放逸に開きなかつた形でいつくしもうとするのが「懶拙」だったのではないか。それこそ、人間の本来あるべき姿を回復したものなのだという意識がある。杜甫が、自己を「懶拙」と批評するとき、その深部には、このような重層的な意識があったにちがいない。

結びの二句（31・32句）

大哉乾坤内 大いなる哉 乾坤の内

吾道長悠悠 吾が道 長へに悠悠たり

「吾道」は、これからの実際の道途と、杜甫の人生の前

途に横たわる一すじの道との両義を合わせもつ。つまり、「發秦州」詩の旅立ちとは、単に実際の秦州から同谷への旅立ちであるにとどまらず、杜甫の内面的な人生の新たな旅立ちでもあったのである。「惘然」（茫然自失のさま、24句）と、どのように生きるべきかを見失いかけていた杜甫が、「懶拙」という表現で自己を確認し、批評者としての自己を選びとって、どのように生きてゆくかを模索する旅であったといえるのではないか。不安と期待を抱えつつ、批判者としての自負を胸に旅立つのであった。

同年十二月、今度は、同谷県を後にして、成都へと旅立つ。旅立ちに際して作られたのが「發同谷縣」である。

- 1 賢有不黔突 賢にも黔突ならざる有り
- 2 聖有不煖席 聖にも煖席ならざる有り
- 3 況我飢愚人 況んや 我 飢愚の人
- 4 焉能尙安宅 焉んぞ能く安宅を尙はん
- 5 始來茲山中 始めて茲の山中に來り
- 6 休駕喜地僻 駕を休めて 地の僻なるを喜ぶ
- 7 奈何迫物累 奈何せん 物累に迫られ
- 8 一歲四行役 一歲に四たび行役す
- 9 忡忡去絕境 忡忡 絶境を去り
- 10 杳杳更遠適 杳杳 更に遠く適く

(中略)

17 平生懶拙意 平生 懶拙の意

18 偶值棲遁跡 偶々 棲遁の跡に値ひぬ

19 去住與願違 去住 願ひと違ひ

20 仰慚林間翮 仰ぎて 林間の翮に慚づ

いささか旅立ちの事情には、違いがあるものの、やはり、旅立ちに臨んで、自らを「懶拙」と評している。「平生」常日頃、「懶拙」の心ばせを抱いているが、この同谷では偶ま、「懶拙」なる自己を包容する隠棲場所に出合つたと述べる。

やはり「懶拙」は、うまくたちまわろうという意志のないこと。「發秦州」詩から一步進めて、ここでは、そういう本性に基づく「意」(こころばえ)を「平生」持ちつつづけていることをより積極的に確認している。その望みは、物累に迫られて、同谷でも果せなかった。しかし、十八句から二十句の表現からは、反対に、世の中にうまく立ち回ろうとあくせくすることのない本性のままの生き方への願望を「懶拙」の言葉の奥に読みとることができる。このように、「發同谷縣」詩においても、「發秦州」詩と同様に、旅立ちに臨んで、自己を「懶拙」と作品中で批評しているのである。自己を客体化して、自負とともに捉えた表現

が、「懶拙」の語にはかならないといえよう。

「發秦州」詩・「發同谷縣」詩を見てきたが、いずれも、自己を「懶拙」という語によって捉えていた。さらに興味深いのは、いずれも旅立ちに際して詠じられた詩であり、しかも、その旅立ちとは、實際上の旅であると同時に、内面的な人生を模索する旅であったことである。旅立ちに、必ず自己を突き離して「懶拙」と作品世界に位置づけているのである。

振り返ってみると、「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩・「北征」詩においても、自己を客体化して「拙」と表現し、同時に、「三人称」で自己を表現することによって、批判者としての自己を確立してきたのであった。そして、「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩・「北征」詩が、また、やはり旅立ちに際して詠じられたものであったことは、注目される。つまり、「自京赴奉先縣」詩・「北征」詩・「發秦州」詩・「發同谷縣」詩四首は、いずれも、激動の状況の中で、自己を客体化して、「拙」あるいは「懶拙」と捉え、作品世界に確立したのであった。そして、自己の根柢を問い、批判者としての自己を選びとって、杜甫は新たな人生の旅に出發したのだといえよう。

注

(1)『中國文學集』第十一号（九州大学中国文学会・一九八二年十月）がある。

(2)元康元年（二九一）に、楊駿が賈后に殺される事件が起っている。潘岳は、幸い難を逃れた。この賦は、その翌年の作。瞿蜕園選注『漢魏六朝賦選』は、この賦について次のように評している。

『西征賦』便是潘岳在元康二年赴長安時所記述的旅途見聞。

（中略）特別在宏大的結構中、運用各種的語調、充分表現生動變化的嶄新風格、顯然已經超越了漢賦的陳規、而開啓了後來作家的許多門徑。

(3)「乾元二年、自秦州赴同谷縣紀行」

（小山工業高等専門学校）